

◀ 渡航時や企業内でのA型肝炎・B型肝炎ワクチンの抗体検査の評価 および麻疹・風疹・おたふくかぜ・水痘の抗体検査の考え方（2018） ▶

成人、特に年配者ではA型肝炎・B型肝炎ワクチンを3回、標準的な間隔できちんと接種していても、A型肝炎で約10%、B型肝炎で約25%程度の人で、まだ陰性のままです。そのため3回目の接種日に検査して、3回目の追加できちんと有効な免疫ができるかどうかの判断をしています。輸入A型肝炎〔HAVRIX〕は、半年から1年後の2回目の接種時に検査します。3回済んでから1か月以上あけて検査すればより確実ですが、通常は一時帰国時に3回目を接種して、直ぐにまた現地へ戻ってしまうことが多いので1カ月後に検査ができません。次に帰国するのは早くて6カ月後ですから、それまで心配のままていることは苦痛かと考えます。ですから3回目の接種時に便宜上検査するようにしています。基準値以上あれば安心して出かけられます。年配者では陽転率の高いTwinrix〔輸入A・B型肝炎混合〕を推奨しています。時間がなくて2回で渡航する時もあるだけTwinrixを利用します。

A型肝炎とB型肝炎の抗体検査はCLIA法で、A型肝炎は1.0以上で陽性です。10.0前後もあれば10年以上有効と考えます。3回目の接種時に1.0以上あれば勿論、0.6~0.8程度（検証中）でも3回目を追加接種することで十分に上がることが期待できます。

B型肝炎は10.0以上で陽性です。当センターの基準では3回目の接種時に、2.0以上あれば、この1回の追加で10.0以上に上昇することがほぼ確認できています。

2.0未満の場合は次の機会に再検査するか、もう1回追加接種するようにお願いしています。その時の検査値によっては、ハイリスクな世界なら1カ月後に急いで追加するか、次の一時帰国時の半年後でも良いかを判断しています。一般的にA型肝炎・B型肝炎の罹患リスクの高い地域での生活が主体ですので、きちんと免疫を高めておくことが大切と考えます。B型肝炎を数回接種しても免疫がなかなか付かない方もありますが、5~6回まで追加しても上がらない時は相談してください。定期的な再検査も必要です。

10歳未満の小児では規定回数の接種後には、ほぼ100%の抗体陽転が期待できます。

次に、麻疹・風疹・おたふくかぜ・水痘の抗体検査についても、言及します。

2007年には関東の大学生を中心に麻疹の流行が、2013年に都市部を中心に全国的な風疹の流行が騒がれていました。この時に、きちんと3~4種類の検査をして対策を取っていた大学や個人などでは海外でも安心できます。企業も慌てて麻疹・風疹やMRワクチンを接種するのではなく、先に麻疹・風疹・おたふくかぜ・水痘の抗体検査をしてください。水痘だけは罹患記憶が有効ですが、麻疹・風疹・おたふくかぜは罹患したという記憶も医師の診断もあてになりません。少なくとも3種類の検査をして、有効な抗体価を確認して安心するか、不足分があれば急いで追加するようにしてください。

当センターでは、渡航ワクチン接種の初診時にはできるだけ検査を勧めています。海外では途上国は無論のこと、先進国でも日本以上に流行に曝されることとなります。推奨する検査方法と基準値は、麻疹NT法で4倍以上・PA法で256倍以上、風疹HI法で16倍以上〔妊娠希望女性は32倍以上〕、おたふくかぜEIAIGG法で5.0以上〔小児は6.0以上〕、水痘はEIAIGG法で4.0以上です。それ以下ならきちんと追加するようにしてください。

企業内でも、赴任先の社会でも、家族内でも、さらには大学・高校生、小中学校や幼稚園などの教職員などでも、適切な方法で麻疹風疹おたふく水痘の抗体検査をして、免疫を確認して不足分な時には早急に追加接種しましょう。無駄な流行を避けることが大切です。